

## つながる力

奨励	工藤 和男 [くどう・かずお]
奨励者紹介	同志社大学文学部教授
研究テーマ	現象学的倫理学における道徳世界

あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい。これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。

(コロサイの信徒への手紙 3章12―14節)

私は文学部哲学科で「倫理学概論」を担当しております。その授業の最終回はいつも「倫理の完成としての愛」というテーマです。どんな意味でそう考えられるか、そして愛がどのように「つながる力」なのか、を本日はお話ししたいと思います。

哲学の目的としての  
道徳倫理

近代哲学のデカルトは、『哲学の原理』の序文のなかで、哲学を一本の木に喩えて、その根が形而上学、幹が自然学、その上の実のなる三本の枝が医学と機械学と道徳だとしています。しかも道徳がその木の梢で知恵の最後の段階だということです。当時の哲学は諸学問を包括していましたから、デカルトは、道徳倫理こそ学問の実りだと考えていたのです。

その考え方は、古代のソクラテスを正当に引き継ぐものでした。ソクラテスは、自分たちがすでに知を備えていると称していたソフィストたちに対立して、自分は「無知」を痛烈に自覚しており、だからこそ本当の知を愛し求めているのだ、と主張しました。「哲学」と訳された「フィロソフィア」が知を愛し求めるという意味であることはよく知られています（明治当初の訳は「希哲学（哲＝知恵を希求する学）」でした）。この知は、誰から教えられるような知識ではなく、自ら問い考え、吟味し、求め続けるしかない知恵であり、人間にとって最も大切な問い、「よく生きる」とは何かに応える知恵なのです。学問は単なる知的好奇心のためではなく、勝ってこのよく生きることへと結びつかねばなりません。

この、「よく生きる」とは何かをもとに探究する専門分野は、現在では哲学の一領域である倫理学（道徳学）と呼ばれますが、この名称は後のアリストテレスがつくったものから、ソクラテスにおいてはどこまでも哲学と呼ぶしかありません。もちろん、その後の長い歴史のなかで、多様な知識が発展して哲学はこのテーマ以外に広範なテーマを含むことになり、例えば自然学は自然科学へと独立してゆきました。しかし、どんなに諸科学が発達しても、それらの知識が知恵に組み込まれて最終的には私たちのよく生きることに活かされなければ、結局はその意義を失うのではないのでしょうか。

## よさの二つの意味

さて、それではよく生きることの「よさ」をどのように探究したらよいでしょうか。よさはさまざまの意味をもちます。その多くは、何かの目的のために「役立つ」とか「好都合だ」、「便利だ」という意味です（「よい天気」とか「よい車」というときのよさですね）。しかし人間の生き方や行為に関わる場合には、二種類に整理されます。「被る善」すなわち向こうからやって来るよさと、「為す善」すなわち自ら作り出すよさです。私自身は、これを「幸せ」グループと「正しさ」グループと名づけています。

幸せに生きることは、おいしさを感じたり、希望の大学に入学できてよかったと思ったりするように、自ら努力する要素を含みながらも最終的には文字通り「仕合わせる」要素、巡り合わせや運に左右されます。私が百パーセント確実につくり出すことはできません。これに対して、正しく生きることは為すべきことです。これは、嘘をつかない、困っている人に手を差し伸べる、など、まったく私の意志によって決定できることです。もっとも、具体的な場面で本当に正しかったかどうかの判定はおそらく人間の能力を超えた事柄でしょう。しかし、倫理学は、この意味でのよく生きることがあるとすればどのようなものか、どんな要件を満たせば善いと言えるのかを探究してきました。

すなわち、倫理学の解明するよさは正しさグループなのです。ソクラテスも「よく生きることは美しく、正しく生きることだ」と述べました。一方、幸せのほうを「快楽」と読み替えて、正しさを判定する物差しと考える立場もあります。すなわち、人に快楽をもたらす行為が正しいのだ、という功利主義です。しかし、このように生み出した結果から正しさを考えるのではなく、行為そのもののなかに正しさの要素を探究する哲学者がいました。二百年前のカントです。

カントによれば、正しさの要件は普遍性、すなわちいつでもどこでも誰もが為すべきこと、ということですが（よく子どもが自分を正当化するのに「だってみんなもしているから」と言いますが、どんなに小さくても正しさのこの要件を分かっているのです）。さらに、意志が他の力に動かされずに決定する「自律」という要件もあります。ここで言う他の力には、他人の意見や思惑だけではなく、自分の感情や欲望も入ります。つまり意志が欲望に振り回されては正しく決心できません。カントによれば、意志に最も影響する欲望は自己愛です。他者よりも自分を優先する人間の傾向が正しさを遠ざけてしまうというのです。

私は、このようなカントの探究がソクラテスの課題である「正しさとしての善」を最も詳しく解明したものであると考えています。

## 為すべきこととしての愛

それでは、これまでの話と愛はどう結びつくのでしょうか。実は、愛にも二つの意味があります。感情としての愛と意志としての愛です。

感情の愛は「好きになる」ことです。感情は私の自由になりません。この愛は私の心を揺り動かし驚かすかみにして、欲望に高まってゆきます。手に入れたい、独占したいという気持ちです。よく感情や欲望を抑える、といわれますが、それは表に出さないだけであって、心のなかの感情自体をなくすることはできません。これも私にとっては仕合わせてしまった、と言うしかありません。

これに対して、意志の愛は「大切にすること」です。これは私の決心によって実現できます。イエスは「敵をも愛せよ」と言われました。それは「好きになれ」ではなく、「大切にせよ」という意味だと思えます。十六世紀に日本にキリスト教が伝えられたとき、ポルトガル語のアモールつまり愛は「恋」と「大切」と二つに訳されました。イエスの説く愛はもちろんこの後者です。このような愛の二つの意味は、古くよりギリシア語のエオロスとアガペーに託して語られてきました。アガペーはラテン語ではカリタスと訳されて、キリスト教の核心である無償の愛、見返りを求めずに相手を大切にすることを指し示しています。

感情ではなく意志そのものに焦点を当てるこの捉え方が、カントの、為す善、正しさの考えと重なります。カントは善の一例として他者に親切にすることを取り上げ、もしそれが親しい人への好意からであれば厳密な意味で善とは言えず、そのような感情に左右されずに、為すべしという意志の力だけでなされたときにはじめて本当の正しさ（道徳的善）になる、と述べています。このように、親切にする、約束を守る、など為すべきこととしての善はすべて、誰であれ大切にするという愛に集約されるのではないのでしょうか。もちろん、大切に相手には自分自身も含められるのですが、普遍性を厳密に守れば、自己愛を優先することは許されず、好悪の感情と切り離して自分とまったく同等な人間として扱わねばなりません。

このような厳密な意味での為すべきこと、献身的な愛は純粋な形では現実の人間界でおそらく実現しがたいことでしょう。カントも自分の解明する善の実例を現実を求めるのは無理だと明言しています。それは、イエスの示した愛と同様に、私たちを遥か遠くから導く理念として、どんな人間をも大切にせよ、と命じているのです。カントはこのことを、どんな人に対してもその人の存在そのものを目的として扱え、という道徳的命命でも表しました。

私は、この相手を大切にすることは他者へと「つながる力」の最大の表れと見ることができると考えます。人間誰もがこのつながる力を持ち、それを為すべしという意志へと形づくることのできる、そのような確信がカントにはあったのです。彼の倫理学は現実の人間関係を無視した厳格主義として敬して遠ざけられますが、カントがイエスの愛を倫理的に解明し、他者へとつながる力、愛を倫理の中心にしていたことは明らかです。

## つながる力としての愛

有限な人間の為すべき倫理の完成としては、以上の意志の愛で話を終えることができます。その場合、幸せグループは感じ取るよさとして個人に任せておけます。倫理学の探究はもっぱら正しさグループのよさに、そして意志としての愛に専念することができました。しかし、つながる力はそれだけで終わってしまうものではないと思います。

このつながる力は私たちが生み出せるものなのでしょうか。大切にすることはたしかに意志の力によって発現します。しかしそれを可能にしているつながる力は私たちの自由にできるものではなくさそうです。ここで、私たちはもう一度幸せとしてのよさに目を向けるように促されます。先に見た幸せは為す善から生じる結果としての被る善でした。例えば、為す善を厳しい練習の結果、勝利という幸せが得られる、というように。東洋でも「人事を尽くして天命を待つ」と言います。ところが、いま改めて考察すべきは、為す善を可能にするような被る善なのです。

ソクラテスは、人間にとって大切なのはただ生きることではなく、よく生きることではないか、と問いました。そこからよさの探究に向かいました。しかし、よく生きることが可能なのは生きていてこそではないのでしょうか。実際、私たちの生きていてこそ文字通り仕合わせている最大の被る善であります。私たちは、まったく自分の力によらずに、特定の時、所、親の下、この世に誕生します。その後少しずつ自分の意志や努力で選びとりながらも、しかし基本的には人間をはるかに越えた大きな力によって生かされています。それは「いのちの力」とでも言うほかないものです。

しかし、このような人間だけでなくあらゆる生命体を生み育て続ける奇跡の力に普段気づくことはとても難しいですね。その唯一の可能性は、普段当然と思っている、私以外の他者が私と共に生きて私を彼自身の世界のなかに位置づけてくれていること、そして誰かが私を大切にしてくれること、これらに改めて目を見張るときです。私のまったく左右できない他

者がそのように私へとつながることもまた奇跡であり、生きていることと同じく根源的な幸せ（仕合せ）ではないでしょうか。なぜなら、誰かが私を大切にしてくれるかどうか、例えば微笑みを向けてくれるかどうかは、まったくその人の決心によるからです。相手の存在そのものを目的として扱えという先述のカントの道徳的命令も、私には決して手の届かない自由な決心の主体としての他者を畏れよ、という意味なのです。

見捨てられた知的障害の子どもたちを引き取って、ラルシュと呼ばれる共同生活を始めたカナダ人のジャン・パニエという人は『小さき者からの光』のなかで、どんな乳幼児でも自分が愛されているかどうかは分かる、と言います。このように私たちは、愛されることで愛することを学んでゆきます。パニエは、「愛するとは、その人の存在を喜ぶことです。・・・その人に向かって、『あなたが生きていることは素晴らしい。私はあなたが生きていて幸せです。あなたの存在をとても喜んでいますが、あなたは大切な、価値ある人です』ということ伝えることです」と指摘しています。大切にしたいという意志の愛も実は、人びとのこのつながる力に包まれてはじめて私のなかに生まれると考えなければなりません。

### おわりに

被る善としての幸せは為す善としての正しさの結果でもあり、またその前提でもあります。為すべき愛は、誰かからやってくる奇跡のような愛を土台にしています。私のなかにいのちの力が働き、それがつながる力として相手を大切にす意志を生じさせます。この大いなる力を人間は端的に神、仏、自然、天などと名づけてきました。しかし現代人は宗教から遠ざかるとともに、このつながる力、いのちの力を感じ取れなくなりつつあります。ですから倫理学も、為す善としての愛で終わらずに、仕合わせる愛にまで目を向けなければならぬ、と私は考えているところです。

2012年5月8日 今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録